小東花物語 七

へ 13
1626
6

1626
6

小夜嵐巻之第七

第廿一　地獄挑灯
第廿二　小伯渡りへ
第廿三　無芸文棒折
第廿四　閻魔王矢疵
第廿五　王宮武落

小夜嵐巻之第七

第三十一　地獄挑灯

卯月末はつ夜もかれまなくありけるさみだれは
そねの空のあしきけはまづくもり先信太お
吉合ありてひやかにてそしてぬ中の此物語ご覧にも
座くしんぐわむかしい夜の此まんとわめぐりあ
れまくさうはらせず驚きてめざれは
わそびらくなりるるふしぎがし先へやうら
ざ大殺と徳させまひぬしめりしゆめのちから
此事此成就して今は無量歳とりたなわざ庄
志ぬんとれせるべしひら貴よせめて人るを

はるかにて何かは。唐秦の始皇の感陽宮も運
つらぬまこと一時よ元ともさしばしや兵燹廢宅の
よいく盛場を一失より便原しなかしいとり玄宗
の花清を名のこ殘る習是までこれ心とはくしい
清もやうく自滅ともなりこうん開主心の内めも
屋をんずる像はあくこ去りて文とうけるめ行の
つこ塵つ生くこ白いもつるまで此獄を行れ云
ふこのあまこバ神とふいひかく遠この濁のうもし
ち昔の恵とかりひわく美うろひる花のみつを
氷やくらんみ菜はし雪見八野遠ひあ小松
ゆ玄成引事云といあしこ方をたこれよ柳橋



とてさまざまく新八きれうきの神成はるの
八雲場よくみとてしかさけのなどとかもいか
よひ恵八花こ月うもわるなうらよやを安
かうはるを志こび郭公もなるよおどろ志
くハ神まりけうしかりをもしくあく
あやめ水彩燭をあ孫バ雨ゆ八花して
まるを反を知月のすあよなもぬおくしな秋
てあくく夜よひさふとくこ獄やあし
ぬれじ今よりハ安樂世界よまいんをの和ハ
ゆく光陰鄭八成休めりさうロ鬱あしお
よりをあいをけう清盈入左位音ない見ぶ

小友風雅巻二

卯のゝ花の垣のもとし計よらりもろくと庭に雪かゝ
しほるしい。是よりしほされ年ゝ咲菓とこそかゝりし
如く作也。句座に對よりおんごとかに事るにあ。
こらそ吾行らぬいへげせる人ぞしいらあるべ
しと作それハ何哉ゆるいそれしそよれバなくさ
こるおほしめしかあふりの流はまくあり哉
の中にはあかきざやらなかわかしかの百のあわせ
あらそぐハ手らかきごとあし碁将棊へらもしのひ
事知らこごろし。双六をわさいがしら。勝負と行
そふりあれのあろべにもごくものもれ名まそあれし
まあるかぎり哥ハ六義雜題あり連歌まを法度



まかしく笠付あそくむかししぞのうちにをいるい
句座の捨句もおかしろくかゝりし取合しらあこと
だらし物合も連歌もわハあらざうのなるやくさら此浄土
をはざらゆりよまとよせさ物あくしいそがらく浄
海いすすまし。やらのわりく。哥も連歌ハ栗じ上文
は栗刺にはされしハ事ぐれをまどしが心の内の私題は。
閻王がんれがどとかもひやるど文庭の卯の花の時気
あまりよまうせちなとそぐれば。彼是取合ものかまし
こふ小浄海

閻魔王身や卯の花のちり心

しかれば。吾ゆまひ。さて句面白まらしいまし

あふりのれは閻王への門の推量にはあるまじ。しかも
や卯の花の霊のおもりけるさぐるあさましさよ殺句
味方の礼義残すべし。扱の句ごとにあらぬ義朝
地獄やふかき鳴郭公
と作りしかば、つまとゝけましは一段お趣へいれまし
えがたくうらん霊運のみるなれば地獄やふかきとか
おもひけるに、時更しとはいふ晴きものかと知れを
くわしへは義朝も見へるあり、頼政は今合はわし
たまるる男二つ中は源三位頼政へしは所属の
ことをしだ頼政はあしは良久てりやこれは年月を経れ
ば宇治の平等院にて扇の芝

さくさいうちてなりわしくもやまちてまりこれるさ新の
ぞんしもいざこれはよ誹諧やうは不如案内にはひ
へざてやらは何なるさまりゐるしやセバ恐れおぼえ
かうもやすで、わりうれしや、それ地獄ややかきのさるなか
もばかりく頼政
みどりの我は月さへ死骸の山こえて
しかさせおへバ、そのくせまいげきしにてい秋風に
の月あつバなだれ我しにて越おつ客くに夏の我は
まうし霄がつうかるもの、継ぐいそがりしこいけるに月
さらえさろしめしてかつれ大やまとおもしだるや
越の人季に地獄破小へは似合やしゃ月之所

はつかうわとやぶれおそてにいそぎなるとく
にのそたられはつらは越わらわとてしし魅ア
ゐりつまゐまゐ人ハ源義経

兄と為り三遠川あとと為りの
利仁公四付を尤久とそしさねる
なしてしてしてしく
源の頼朝公ハ世きくりの花こく
の鹿人がいつてん
平八郎門付と為人ハ鬼山朝ながゐ
ゐふりとゐりまゐふ
松軍これのち四付りまハ北ハ家
ハ兵衛のまへなりぐし
小松の重盛公ゐとりの大八車を引つハ
鉄牛なりへへ行つさとそ
源の頼朝公ゐ為人ハんばくしこりろ
まれハ鉄牛をあんつ
平八忠度公ゐとりハ若ゆ石経毋よわ
そりはしりのゐりゐ

ゐりとのぞこれ餓鬼ハぶつく餓鬼付とゐりはく餓
ゐてまとを云ハ大蝙よゐ付ゐ
平家物語付ゐ為人ハ本のこ大蝙ゐ
ゐりハ後本ハ後そはしん
不動八月の前八をりの
八幡太郎義家ゐ仏ハ花ごく被
のゐりよりの初ん乃ゐとゐ付ゐれゐ
ゐりよぶしりゐ四ゐ十ゐ
ゐりゐ牛ゐりまゐ為人ハりりゐ
東の夫ゐりゐ為四ゐ人ゐ
ゐ三十二　小松後ゐ引入
卯月ゐ三日八夕闇よ義家為義父子ゐ後六人為ゐ
ゐりぶれ婚のこゐ小ゐびゐ
越べこゐ
ゐりとくゐよゐ後ゐ為ゐ
ゐりこゐくゐひゐ
ゐりとこゐくまゐりゐ

よ半とさしやうの物ども
ば運はこぶべしとぞ
仰せられ家やの所
かうしのかなこふうこ
事共あるべきうハ
を不審ありて事
共貞任宗任とは
し付人ども共はし
体ゝしばかりの
くらの物まぬと付
事とおもひそハ



そしてしの物ども
しんとはなれて事
しゝ給へ合戦
らこの貞任がせいこ
人見まる今人の見
えり彼貞任が鎧物具
見もかどふハ
よ我やわけのんぷ
こゝ迄六人さし
ゝゝわ塩ゝうゝ
うゝべ迄六人そ

小夜嵐卷第七


小夜嵐卷第七

はつかのよあんのごとくあるじしりくあらをれ
らそこちらはぐさしかるあるよそこるはくらわ
ふくそのあいだ散ちりぬ陽炎さぐ陸あれ面よあく
まくびあるを床とちをえうて焼れ浦葉もおがれ。
芦八束ぶそそぐ拙さりじきまゆぐしぞん
なく向の岸よはく岩ゐ面とはくていくいけがし磯
ゐ人こはかをくとれ為義一人門の外面よこちよ
つ甲とぬつく小ぐ忘よかわ行をはハが度葉門
ーさんごしい板なれ北四郎ちの使なわゆ伐
まあそ夜よゆぐしいうこ若労ーはとえ内
いつくちわちくとがぐ行をさせあくうくへわゃ



さんし仕をれば門番の女房番衆の灯とうげかく
しふはくちつもせ行事をしをとみこいこちく
なわ女を不審をしに為義とえまいくちゆさ
ぐいよくくをれ為義へめれしふ仕後なわ為
義もいいなれ申なるうんしかりい女いふ仕後
ふくいなれかし仕をれを女を為義あくて
ゆをもふしまくとうくぶ仕後ゆと
うを出りをうふつのをぐりとらくこ内へをが
仕後用とるぐ。毛ハ義しゃあるうんう義に
三ゆしなをとおくをなる事り三世八御義ぐべ仕
世界へまりてを為ハいくおりをんくしわとれ

しやうぶかりいかもてまはりけるが今度不思議の事
あり〳〵先づ立ち寄ハ山〳〵ひとハ大ねぶ軍にむかうをせた
まふなり。陸の内もりにて五人ハ女ハ男なれバ行ゝ
ゐまいりてせんべさやうしもあく。ぐ明書をもらうこと形
なりつゝくこうやつとまいりをせかまりかゆもりを
あり〳〵ぢうしかぐ〳〵ぐんぜいよりまいりよ。義
八ハ郎小立ぬりつゝをかまきをつゝをしぬ書ん
のいまあくかりいぶ十四日ハ義ごとにはどろん
をせんぐりやしんるよりけりかぐうきんぐけるく
ぐうやんぐれぐれのぐうん。女ハ和ありもろ〳〵ろも裏
ハりうさいもりと居やんべうさぐ天の山にりくれしとん。今



ゐとかぐ〳〵ゆそやしつうし。ゐる義さよし後とかうよ
とくにりくぐ。ゐん〳〵くし。ゐる。ゐる義御使ぐて
なんぢ女なりとうしぐをゐとぐとせものよかりいあう
ゐんにりかよりもし。佛神の山にりくれしぐうりた
ゐぐ〳〵ゐをぐ〳〵ハなんぐ宮がよいなひそりゐ。命と
捨てゐをもそ来りゐもりうしなんぢこれよりう
とバ。ぐ門の中よ入ゐうう。見うにうゐうしバい
ぐゐんべうしかりいしゐ分ハさハなくてぐ門よ入
そしぐ金量殿の先ん係りゐんゐ三千世界
の内ゐるゐなりりぐ人物中ハ兼門奥〳〵ハ事なり
にりうう。ゐゐうしぐ仕うしバ義女ゐくひ

へかしさへゆんよりれてぐそくにまて、閻魔の
小の方にはしに顔はうつゝきにけらし、舞しけ
身も不自由なれバ、志わくれいとゆとや。奥にれ
承とはかけまたゞ清く、このかうなべもなくざそふ
おけつかいすんしかよりてぐわかと、門番がこ
がありくがずれし引東に参りさぞせんとみへれ
てかもりかのえへよいりもとやらちがうしさやかるこそけ
もさしば山門はなりしかれしバいそしあとバおもこまれ
とぞさせまへ、おゝ大かやさんしバ小倫法光てよ、見
ち。役所くう前と出るゆれしかるんとて、こしとも
小門番の女小倫法なりとせり、見バいさゝかてびぬる





りのをなし。楼門と見へ広く、総門は立派なり
御法は為いさえしぜ、大将より入しゆるも。
御法ありさらバ門のうちにて、とゆくすんさらりが
くふ小門をぐりかどのハもそ、会ひらくれりにさ
あしすりてをゆ大門のわざハ中ぐもげてひとら
してりそにうふまなしくバ、志れあさはまし
くらしどりて中へ入、おりかハこなさなわとそ、為
剃で徴しすりの奥のゆり志のび入大門のさ
りさぎんしまさまん光、御法がやまよ色がびん
色々んしさえ、入れこゝの音若小く鑰ごてを
てかゆれハ、塔中の東門かりふましにまいらし

先ずこのたび為義ハ出家をなさせ給ふ。その後ハ
髪をかなぐりあらためもとゞり
ゆひ給ふ。天狗強軍勢行事なりとぞ人申ける
しばらくハ太郎義朝六条の判官為義父子
都にかくらせ給ふ。商魔王天の魔王
無量数の天魔あと跡今ハ父子ハ人ぐ所ぞ。
うけやぶりうたをはぐ。強者ども
うたの東方八陸奥ハ先と聞ゆ。義朝為義
先陣せられたるぞ。ハ陸奥ハ心を合せ
ぜめに責めよ。敵を追懸ると人ぐ思ひ
とかきわけとぞ軍兵ども云ひ合ひ。



天狗共もぐめりけかのふ十方にさえぐ合はし
ものの一変よどみし責ぐ合ひ。東方八悪つぐ
強の宮皮獄卒八万余兵ども
此矢と取つぐ祈敬ちやうこと
天地とのゞり坊ぐすもどうかつぐ軍
共ぐ聞ゆ。いまゞ為ぐとおとりぐ
強と越へ矢あるよ。されしもあり。七日七夜八
その夜所を出に息とはぐ。
もてハ晴ぐしやまいとあらしてけも新帝と
ぐ兵敵へぐ。洛中ふもつぐ八万余兵ども
て八六方がぐ合ひ。この敵矢ども

きりつぼ殿、かぶりなれば大軍なれば鬼神の威力自
立しうせずおそれて氣色なれば禁方
いよいよいさみかわりて三重の城七重めぐりの
やぶれてけうめいやうぞなりふけり

第三十三　矢慶が推参

かの所のよ長二丈計れ鬼面角天とりつきて眼
ぶりて色黒くぬりこうぶりられ髪は赤くも
えわがりぬ此ごろあくを見聞ぬかどのとそろう
なれば毒蠱蜜れ還らぬ八大神秘技とのつ
さげ者ちひ焔とくれちらく市来る人馬を多くは
とそしておそりびうしろよ退さけりぶやいらをば



いくとなく屋ぶこし若人まもりの所よ大音声あり
云けるい和れは是皇大子にはけんなる大部現明や
ふ老臣ん寵人なるが所ぶこうして玉天へ馬を乗入
細矢とる那ちこをふは恵口といいやをもとしお長大
とくるる三重四重れ天殿焼掃りんとまもの大罷れか
どいそぐのつぎんやに義をとらびれ智とおく
るる所ぶりとぶく対ておくさんとおりひこしご
を大王れ動宮ふはやれわうー皇大子のれを留
まりしなりかくわりをとうもしゆ今ま
でおぶるやうこよ。はごとれの罷人天地の月にを
ちんりうとぶ行場よりうぶ殺し微塵とあり

てかまうんぷくらやついぐらうが不なるしやしぐらい
しぐるしにの眼といふうせバ電光ぬだとくかゝやれ
いくゝ分ちり火物ゝくゝ大聖不動をかゝやらん無
変色とんくゝさやいかしものゝ部ぷしちやぐみく
人よぐらしいゝ生成弱命いこて今大動成
をどゝどんい生ゝけるてその甲髮なゝぷゝけ待の
用おしこちりひ今度三条小橋治家迄と命のゝき
あいよきゝふゝ命。鉄の棒。長さ八尺寸筋ゝ涙ゝ
づうゝてけゝゝ申ゝゝ山樹と。あくゝけりゝわあゝば
いゝなゝ命大部根刑なりうゝすゝゝゝゝゝせゝべゝさ
わとゝおりひ。鉄の棒と先ゝゝ眼よりいかゝで味



方の涙ちりゝくゝ命。大部ゝひゝゝ云けゝゝゝ
々色涙の九部三支の利友義伝のゝ門ゝ。秘夜の
武荒防弁支ゝゝ集ゝ事で大ゝ九門ゝ大部ゝ云
ものゝゝ代使及ゝかゝ。鬼人系ゝ光ゝぐゝ集ゝ
安ゝくゝも芸術いゝゝ待屬せび黄石公ゝ張
良ゝ伝ゝ。一巻ゝゝかぐゝ行事の月ふ
ゝ棒ゝ使ゝひゝかゝゝゝゝゝゝゝゝ。
ちゝかくゝもゝゝゝめゝゝゝゝゝゝ
わゝゝう。幸なゝぷゝゝゝゝゝゝゝゝ
ぐりかぐゝ打ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝちふわゝゝ。須ゝ胴ゝゝゝゝゝゝゝ

斜よなりにいふわらべが児なれども手足たらりのをも
うごきあへくねくろ鉄杖とふりあげずんしもたゞ
も肝癪の首なりけるバさりくへども犬比よいかれらくも
とるくぢくしもの大動現前なれバ多より弁慶した
多りふやうてゆうあふ藤蔵ハまへ申しまれども弁慶が
ちやうくさよくなしれおやじん代不知案内なく油断
しまかそもせぞんたなからしわよひくハ白児どて
大動がなきとのまた信とりんく肝魂もけしとめくさ
あかゞ八十四人見ていまあすて犬動が首と胴しかり
いかせどもてゆうなく弁んあ角よ縄とりうまてはふりて
これぞし出ざり申しまれバはかはりのうさん入くるがい



よりもひやうやうとして咽の中より肩とかけて血
付をハまくられどもいそ波吸膏薬のききくるも
なく終よいおむとして死けるとしん弁慶がちから
百余年あつぶれども生付ての重宝なれバはまさ
藤ざわもきわし人とや小松の重盛けりハ人の首の
あちこちして児をさし坐ごくとやぶりぞおどし多く
大軍なかよいげくふくも味方損じられといふ
まをとこびそきれ天のなせる所あつめかとかど
小ぎりうへ何の子細のあるべきなれしぞて猶て甲
の緒をしめよしとえまちくさ其上つまご脇中にハ
十王のてりびん鏡をかぶりその外年頭馬次襖其河

阿羅漢等の衆、獄卒人頭馬面牛頭羅刹、龍猛虎の類まで
義つよく忠こころいうかぎりなく方便をめぐらし行ふ
あるいは神変不思議をあらはしたること云ふばかへ
ば智恵よき分かれて見れば、ぞくぶつと貴殺
の輩はくはらく異わるくしてぞんぜざる形よ
かるとて又よび生をこころのえ神しなれば不思議と
なんぱ中く云へば物ゝ事たなりしかば一遂ゝ
どうしてはぶ必ずそんじるあるひこどろく一方うち
れぶりなれば人数とをそ〳〵ぶりてとゝ閻魔王
ぐ城とのくるばりなをあるひをもれそ〳〵
ひるべ〳〵山城中とさんかうばへるはうしずて

人を責て人を責ぶはう〳〵
かしてはさんなれ事しをぶ行をれしなぶ義をあるか
ぶ〳〵ぶくぶりぶれ出ぶはゆるうしふ
五人数とのをそわけとかぶ安婆みくちぶれ
横多門三蔵西域しやうん云し。男義勇八名智恵ふ
かさものあるくぶ四国赤坂の城よ義つし行くさぶ
くりをそわっとぶめぐ〳〵高ゆ数多射数し。
打数〳〵あるよう〳〵人名智恵ゆきものはかりあひ
りかれ又と仕われ行ぶ見ち色かとぶ化生へ
ぬぐひなれば小松殿のれ行〳〵不充なりし人〳〵
ゆあるう。義よ又ゆメてあ色ぶ不ねの去をけりぶち

小夜曲長者

一己紙ハ城中に鏤棲甑錺ごとく二児の腹変ろ。か
もつ幼がの分しわが大王のまんうん好くぞわらくそ
あいしまびこしなれバ大王の此身がもわかも立居こ
おどのものぺざいなくてはやく命ハおしさりのり
かゝもつ二児一所よ事たのひ。勘そり小讒合せけらハ
此世の折とえるまで。とてもを大王の中でひ運をのり
こでおこをとこげられ。つまつれの命下安穏よあるべ
きかまかりいをよつバおれバ親ぶどもの命。何とぞ
しんしるれうるやしれちあやしと共ぐらさんよ。大方
れまかくハ中こるもけまうぞすれバとそれしかぐ
大王の臣首をとりて。敵のうえんるて宣命不山思召を



此命下るたにうん事ハようしたつくごご二児胴様志あまを
し親がく寝殿よれこの居けふまりかわり
りもるふくぞさわつるよ維像のうかがひけるされ
ごし大王の運いまだはさらわもんぺもれまなくて
まつ色ぬおる夜此中のはりまうやうよぬけがらた
すかりのおうぞにいうせかひけるとずハまとしかの二児
寝殿よ志のびへく。王様と見ていまりつきハあほ
をもちてごとの寝ぬけや。分様ちしとれおりへかぐ。
二児勢様のの枕ようそい。剣をぬき疏よの首
をうんしまけるが。大王の運や謹よのわきん
不計の目さめて竜眼のひつきあへバ二児の何く

らよ立とりいしが。劔の力ひろよおどろかせのみ。
のもしとれ四調壹よかしれかせのみとのづ
さぐかし追掛きたのれ衣の神を引切て大王い
御命はくがあくわてせのふ鞭橋祇塔二鬼を赤ぶ
れ宮変よ修ぶれしぐうれんちけをいんゆ中よねい
まとちくしやうすそのくち奴のうでと加勝ぬう
つさいく燒教ちーごうしたくまぐわれすあつ
ひても情あくやうれぐぶんとくいろぐをの
よ油りとべうべしてうう

第三十四　陶魔王の矢疵

城中の鬼うと寄合決合をけるハ山中さうを別か



ふものごと鬼うちよお。行の乃せんもあくのまうの鬼
人ぐうにうれ蓋かれ死とうれ事は情ちよせん
ぬ度ハ大物一度よかくあ所くあくかぐひとうれ屋
しやと云合。おもしくの出立姫これ乃をとおさて大
王八四前よ集りよけうハ山中さうもれ者ども張
お。神くの死とけうまつる元ハ敵あまうこの中へ鬼
うちよあおりにもりてこ歩度ハ二度よあお。同ざ
海ーき戦つうりれ四国ようけりさんぐ王ハをんの
屋ぐうへけぐうせをひてれ鬼あおうれりよけ
いい門れうせあうれうれだ。永童魔。永竜鬼ぬき
ら二鬼ハ大王れ勝ちとうぐの。倶生なり永童

八方に火焔となり瀝て氷竜ハ虚空よ躍
震て婦しく人乃まなこをくらまし衛なり牛頭
馬ハ人乃大神をとらへ引され棒よはさめくだき
て打ぐ大地よなげて分散しみぢんとなせ
まさかり人馬形ハ虚空とうけ悪鬼を喚つけ
人のんをたなをくまし。目足とまきくませる徳でふら
こちかかる変倶生。獄卒等我しおがしき見ごて
七八十見艶門さしてかんとんじ比久ぞぢ。據
門綱よむきまえる争なれハ毅多八猛虎悪竜
蒼蛇鐵鳥。猫物よろげ悪鳥。悪獣乃むぐハ数
かぎりもあくもしつてかんと啼さらける却天



地もひゞき山もくづるゝばかり。時に大王ハまた
くらへあぐせるひ玉乃冠乃纓をたれ和の常
としめあまいはやくらべゆどとおしむかうせ。叢さう
くまへわけ寄ふによりハ宿ひ守宿ハ丸がさく
けかくと。仏勅とおもひし世界乃主やしたなり。
三千餘業を治政と正しく順さをもち給て抱に
妙婆あり。其宿え人乃罪科を糺明をなし御も
丸く心よ。邪なく。己が作る罪科ぞとおもひ来り
せんぞのふるめ。仏乃おそるべからず。浄頗梨乃鏡よう
けし。業乃秤よりけ。己が身。あしかれ。亦惱の
獄卒飾てまるしめて。善人ハ浄土よとらり悪人

いしごろもをとりかくれば、九郎一騎へ
なりぬ。おのれ今度独当れば、年来の遺恨
大義思へとおこりぬんぢらよ大敵日数わたり
ぬるぞ年来しいの高名といひ九郎よなふかの
うらこあひて邪心とぬくこ。恐敵とふかの
ひがごとなりぞそこ退けしぞ宮ひけるぞ
あわてのあなたしばあ者ふしぬ夜ぶ
女兎むを居ふるあ。下野国の住人那須与市
祐宗といひ男。彼は源平八鳴の合戦のあた
平家の私ち出せ白扇と射て敵味方れ見物
おどろいぬぞしなあよ日あるあ。るあ



はるゞ今同魔王ゞ都とうしば敵てはくまかてひっ
つてこ時の扇よ似ぬ。一矢射てえんしかひ
ぬぞなかぶと取出ぬうちとあくうはは
ぐいぬ引て芝どるのぞ矢わやまぶ大王
れ名ぬのれのり骨と射ぬよ中ぶ
都市王八冠と射ぬ。ぞはなかぶ友の平の
根かそくびけてぐぶし射ぬ。分神ぬやは
矢大王のれぬ。まへ向ぬあくはるあぶ高九
れ命をあやうぬ。いまぐれ運はまぐぬる
やぶぬよあひとありぶそて不思義なし
都市王八大仕合ぬて冠牛と射ぬくぶし奥

小夜風巻第七


小夜風巻第七

熱わくつうのとさまるしなどぞくそくなる腹痛
よめわくし痢はほうぬかとぼりとうをとるの女
まのをたるたわけわうろなる腹痛はんの外
不仕合わくぼのとうつがいとしなとして。
あしせんそぐ〜都あまをはせいもくさゆ寝よ
あることは命は金ろろ〜とやあうりたまこれよ
頭せのひとわと云程よ。脇中よとたへしくん〜
さりぬ。永童永竜年頭馬歌うんやうのよわんま
をやうし。麓中男女へうぐしきの巻賊とわび
ゆ代初わげうつしゆぐしへ。あをやくし計ぬ。
行乃天部しきこえ〜侍綾羅紬備のれるうの



ちうぬ指乃上ゆ〜くたくゆしうぐ大を代横さ面ゆ
あさをのひいとぐれ生付の赤乳なるおをちよ上に血
流々しはれ用し鼻を丸とわびれ疵いくしうう〜
こうへいはれ血ととわんとれはがうちなんはまる
ぬ歌ぞうしんりぐさそいあうへ膏薬狐の花いの
ちうりうんどう波を元あうを付あてまを代所血
こまわしうの。ぞを上れ用まひぐうをあんなうしうく。
れ典薬乃妓寶法ぬまいうをれ豚とうぐひまり
光御氣付くうちうぐしてまつくんうて。氣絶
薬さあわくうぐよあてまつうう又補り藥とうしう
けうしれをを代れ氣うれくうとみしぐわけをこば毒

方ゆゑ内合せられ
齡丹。竜脳丸。玉寶丹乃やうなれば薬
れ抗箱に薬袋ばかりにて。醫療せんひとくらい
てあつらへまゐる。月卿雲客。乃至庶人俱生。獄囚
金神。司禄。防羅蓋。地悪獸。八類まで集り。ゆるか
しありさ。なたにうもんくるる。自来ハ餘不用
とちらいの。女御。更衣。侍命婦。上臈。
もあまりまつ。麝。心悩しとしやうしつきさたり
とかのひ。我とわしてさたのふ。皇太子
暇。小内。方成ぐめこそまつ。天王。桃
ちそしれ。ハ大事ゆまんこれいちいふと

同せらんどうしうかはせ。あるかたのわくれいつへ
おうしバ又收寶法。京れ脈とうぐひ。恐きことは
そんじおうれ竜。義ふ法。下ぐつづりさ。せ三
れいつしざとやメ。ふ呼吸しづんてう
ケかりし。法王寶。官ものもくいふと同
ゆへハ收寶。ヤされけるハれ大事ハ。ものもくけ
おうせのふうれ。ハれ。あるる。今一度。
驚とめされとうべさうやうしけまバ。花こく
先金鷹。ものこ世界。ゆ。沈数なれ上ひなるこそ
ゆ。魔。ハ。雲義とつい。老鬼。ゆ。樹下。乃
羅。音化と云外科醫者まいるく。ゆ。醫者

ふるの墨ぶの風流の都遊興乃蘭麝清眼車
運乃櫃ゑと清橋まいくまこてれ脉とうぶひ御紙
ゑとそそそそまはるそはれ伝もれ大事いるまれ
ひひとはれるくゆくよ俗てよ下いるはだ言り
まくいれ庭所乃不自由なれいやくくわあわく
ゑまんと奉廣王大ゑまは俗ゑしゑて殘まいるや
わくゑ教ゑてまろりれめゑごまいていたるす
れ事なるくそくゑ外堂あくゑその日をやゑなく
書ゑくゑ祈よ大ま又よりくせ無ましれ氣ゑ月て
ゑれば御息所とそでめれおの女房遠祇とゑ
よあてゑの姫ゑを見ひくりゑいよ下なげさ



とをよかもれ見ゑひ。霊魂ま王神よちくづされ
かとはそんくあ琴下に云甲斐なれれ夏振よ
てわくせゑふで獄卒ごとが見る用と恥させ
ゑんくれ疵はさを御れ事ゑくなゑしごとは
はくゑ対くなくしそのよ山中のれくゑばくく
ゑまを見さくはどくれ氣色の黄那そひさ
てはくとんくくわれいとくなれさせゑれれ
湯よゑくくゑわくをゑれくれまいくせ太ま姫ゑ
のれいとやとあさせくゑ多へくゑ姫よ今朝れあさが
きいくとゑゆくくくくまいくざわくゆへゑくを
わくんくゑうくひとまて行わくとよさせゑの女房

遣といふあそそまつ〳〵せもの〳〵大きなるつやく〳〵
〳〵と勅宮ありしれてをやみ世後男女を
あつまりいはれとはとのいつぎく城中わざわひ
ざ出たあり

第三十八　王宮落

真教実の別ぞわよ大事成やぐらもわおろ〳〵き
て寢殿よりゆ〳〵れ宿恵方宮皮倶生ハちよ及
ぐ〳〵城中の出月とあちと所をなく灯の動く月
中ぐ〳〵かつげあわとしづわくよ下れ氣色成
んえなれ祈わくぬいて小変よなりて宮養ち
さじ大事ハよりおりぐ小いせもの〳〵れ病いく〳〵八

上ようつげ〳〵ぬ〳〵ぼく〳〵おかく〳〵しがとさく〳〵れ寢を
あ〳〵びぬあこりかれしてひてまりて沢ロこ、
ろ〳〵寢殿の小の方ようりの変あ〳〵ぼえ〳〵所
大事出花とそぐ〳〵そ火〳〵出ちやぼち
れまりの出宮重寺さんさふぐ来て火事ちそ赤ア
ふしとついてあへぬよいわぬいろま廻橋の新塀よりわ
火とぐ所ちみ〳〵しぐ狩ちあく先いろぐ〳〵清
業の表殿てちぐめ六十四殿りぐ出ちぐ〳〵塀金こ
と〳〵〳〵火〳〵〳〵り金剛宮橋天等園を焼のり
ぼ世界中の三ち八色階火煙八ちく〳〵ふ物て日中
ちわを明なり一百三十里四方一寸よ火〳〵ち〳〵

清ねがふ金堂とのべらる堂楼もかのほのかにまぎれ
もろく色あ祠堂黒煙ようりわきあがりけぶりも火宅
八境を巣ひ移りし所ハ安楽乃地ともならず焼火ところ
ばかりめて平家の陣にわが火矢を射かけやきたてて
あわてふためきしが錬火も数百里とぞやかし焼
中にハ焼死をなすの者数を知らず変成王なが
せけりハいざや浄せよ大王ハそこなひし房へうつらさ
せ給ふ御幸あらしむとそのは鳳輦玉乃輿御車
ませよなとしつへバそれも焼たてたる皆焼なると
やせハおやし乃枢戸乃かわさる殿やうしくもそれハ
ふまのせなりかさあさんとさあよむとつくハかよあて



こせあのひくろ大王なれバのせまゐらする枢戸なりバ
とれて既落しまんとしけり錬乃戸をとらへし人々
やさんしてもいまだしそのいろをなさずされバその
戸をおのずからそがさんとしけるのふくゆひくり
お大勢して九たびしまわりし乃山て岩乃法窟
わりこそのすてまいらするに乃れくらそのかく。
上らう下らうかちくだりしわくがいつとかつかのまのうち
まつ聖太子乃れれ多彼ひさ。諸王貴族倶生獄卒
まで悉てよれ佐つきまりてに山路を何りふ急ども
あふがつれ袋どりしがかふとさへあるとすしいかゞ
ようおぼして二千余騎従列おもふ事ならん表紋て

巡りむくし古やしりひやこしりひ栄花に盛
とちりぐ小なるをゆくもをハわく御くされ錦衣れ
新ハけさてくなれし洞りくれにみなえてハのきと
いくぶ白ふ遊て見どうし谷のけもしそふてひ
若花浅き袖とあゆきふきれ古川そりひの細んちそ
すらよかくわ落り雪ふ變成王をご家宮殿のうく
昼けるとハ見りし白をび閉し大王ハ御鎮へ入や
さんしかりひびざなひかさせまひされ花給今王
六よわをかうへさんよ焼亡そ草木しおちれ二
三里四方ないくら御都氣とあかりて焼のこる
雑木立木かりし枝葉色なく殺しハ風よう



いくかれておちりかたとくらしなり變成王
よそふかりかんのひゆ光かられ尻へすてけし小洞也を
どゆりびざりは大友王八方へ命へまんそと白
うなり御淵の御京と称遠よご敬せまうすへつし
此川まよ人ハあきこあ御寺ま大王御不審をこれ
ハ今度大殺よはさ子とえくよしてるる叡ご御
風ゆきんみそかまうびそのまこしにまひりかりひろ
まあひま給んなくるて置きるようしやよきれバ
大王やノ色けるふされハさそたりうん我しんもまて
おりふ为稍あられしなりとへあくらろくれ我は細と
ぬりし多人バれ從のわきさこし枝どこりふきかり

その数多の子たち大王八歳の時ふと行のなく
見まわすに小八わくの子に小わうまた
くれなゐの色よりて美しきもの多くあるを
かくもこひけるとやいふ大王八の頬の赤き様八花
と対さるものふる八鼻八さんの小ぐらいに高ふとや
あるしのあるへしと父よりわはこうずるけう漢八武
帝八姫夫人夢陽ムポ人の出の色八しろくとん
ひかくに成よりよりしこうふう又もあり和州
延喜の御宇三位中将の御鼻先八赤く
あんじ八高の強しとそ忘はし花し泳めるもの
のふとかるひあるる母もる流よ御条の恵林の



義とる生涯女の行国とうちあく見法よ法の
せるへどし八鎖も頼朝義仲の焼亡しけり
しれ見たの頭切しるや日数伊くぬるもたも
高うたしてい武術のよりあるしたしあるに代をこれ
代の見とく肝魂を分よそもそ大王の八瘧川風
あるくくまあれさるものふんあるくくあるくあ
しやのきまへば浜湾の素師堂小八のの和の
まをたくくく休めるそまること沈朝食の京清
しいふが科のよりの菜師金瘡の方をもりしやま
ちろ八花よりやばもわ来る代為ある。陸客あく
よびるる大王にあいせたもる。京清八疫とみくく

まうり癰疔の疵ハ底うてつくこゝやものこゝろ
暑毒の疵ハ四うこ底の痛ハうとれ初めくしの四
う清四頰骨とかゞくゝ後村切ゆゝくこまゝ
まこひ大方の療治みゝ蟹ゝ蟹ゝ四内素ふハ
生ゝ穢散ゝ天南星ゝ生草草とくゝ禁好四
ハ四書之と相添揚ゝ生ゝ四付素ふゝ撫靴ハ
あゞゝ鶏の内まゝ合て付書ゝこしうを
四うゝさハくゝかゝゝやまゝ若こはゝかりをし
ゝ天を行けゝハゝまゝて四内内こ
ゝあゝゝ自害とせんしのゝまゝ風冠かゞゝ
すゝ石の弟とうちゝゝ読ゝ四ゝこ

子とゝゝ内ゝ主逃四夜の内たもゝにをゝ付ゝハ
いゝかゝ四ゝ見ゝ内ゝくゝゝこもゝふゝゝふゝ
ゝゝゝゝ自ゝ天ゝをゝ今ゝ見ゝ
てゝゝゝゝもゝゝ世ゝ太子とゝゝ四ゝ
ハ四ゝこゝ弁ゝ卒ゝふゝゝゝて弟ゝ
ゝゝゝ乗ゝ自害ハ四ゝゝゝ自ゝ
内ゝゝ宮ゝ十方へ逃散て太子ゝ付ゝふゝ内
ゝゝ太子ゝゝゝゝ世ハ方内ゝ内ゝ
ゝゝゝゝ鬼ゝ姫ゝ敵内ゝ生ゝ
ゝ自ゝゝゝゝ

[illegible]の小の方よりひめうやよりもこれ太さよりしたは
よりもちろんこれ[illegible]さうしかゆ[illegible]御
[illegible]ひろくしうしびびうくしたあるくしういま
らこそして守護の事立あげいわ[illegible]に引てからら
て一番屋よりこれ[illegible]ものいけ[illegible]
あくこ[illegible]戸[illegible]さうしびばもあくこれ番と切りしわ
[illegible]門よりうしうしあ自紙経ハ文相変じはうを泥
[illegible]ようげりもて是下ハ麻しうしん口婚さよ[illegible]
[illegible]屋上のたよ方ハ[illegible]ハ跡とこもおうへ
[illegible]ようしたかだ[illegible]ハ[illegible]果くこ[illegible]代よ
くうし清てしん事とおがしめ今変ふくれ自



害とうげさもたつ必実うハ相浜の[illegible]
[illegible]種の仙矢ふく村数[illegible]わと[illegible]世まもも
ハべうまくかだ〇ハとれれ恥[illegible]
さ自くくかあてれ自害ハやもあり浜湾[illegible]師
[illegible]ハ海過なしば[illegible]
[illegible]もこ[illegible]一村松ろけとたうあ[illegible]
くわうか。古[illegible]ハ板るれほとこ[illegible]
くあ石ふくもわくれとそふるもわかれ

小夜昆奏之第七終